

頭韻式「モルト・アルテュール」について

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2332912>

出版情報 : 文學研究. 47, pp.31-41, 1953-12-25. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



頭韻式「モルト・アルテュール」について

中山竹二郎

中世欧州文学に於けるアーサー王物語は多種多様であり、その量も極めて豊かであつた。その創作活動はフランスが最も汪であり、本来この種の伝説を生み出した国土であるイギリス（ブリテン）の作家達は海峡を渡つて流入するフランスの物語に靈感と規範を求めて、謂わば作り替え、翻案程度の榮えない作品を書くだけの仕事をしたに過ぎないと云つても良い。無論中世イギリスの文学作品がそつくりそのまま現存しているわけではなく、散逸廃滅した写本の量も莫大なものがあつた。しかし一般的傾向としてアーサー王ロマンスに関しては、他の多くの文学的ジャンルと同じく、中世イギリス文壇はフランス詩壇に追隨したのであつた。しかし仮令種本はフランス物であつても、イギリス詩人がその想像力を以て素材を消化するとき、そこにイギリス的アーサー物語が生れるのは当然であり、殊に天分に恵まれた作者の筆により傑れた新しい作品が現出することも可能である。現に本誌第三十四輯で筆者が紹介した“Sir Gawain and the Green Knight”（『サ・ガウェインと緑の騎士』）のときは正に傑出した物語文学である。また本誌第四十四輯でその解説を試みたスタンザ形式の“Le Morte Arthur”は前者の水準には達しないとしても、中世ロマンスの佳什である。

これと類似の題名を有ち、しかもその文学的価値に於ては遙にこれを凌ぐ“Morte Arthure”の一篇を紹介して、若干

の考察を試みるのが本稿の課題である。此の詩篇はイギリス古来の詩形式である頭韻法 (alliteration) によつてゐるので「頭韻形式の Morte Arthure」と呼んで、スタンザ形式の Le Morte Arthur と区別される。時には Thornton Morte Arthure と呼ばれることもあるが、これは此の詩篇の写本の製作者の名を冠したのである*。

中世英文学の作品にはその時代と作者が明かでないものが多い。伝はつてゐる写本そのものの年代は正確に推定し得るとしても、はたして写本が原作に忠実であるか否かは多くの場合疑問である。原作者の草稿は通例写字を専門とする人の手に移されて謄写されるのである。チヨウサアはその作品の誤写には相當に悩まされたりしく、Adam と云う写字生に對し厳しい警告を与えている**。殊に中世英語のように地域による方言差が大きい時代に、写字生は原作者の用いた方言を自分の方言に置換えて写す。語彙ばかりでなく文法までも變つて来る。北部方言の写本で伝えられている作品が實際は東方中部に住んだ詩人の作であつたり、或はその逆であつたりする場合もある。

問題の頭韻式“Morte Arthure”の現存する写本は十五世紀の中葉に書かれたもので、その筆者は Robert Thornton と云い、Yorkshire の生れで Lincoln 司教管区で副監督の地位にあつた男である。

原作者はスコットランドの詩人 Huchown of the Awle Ryale であると云う説がある***。彼は十四世紀中葉の民謡の作者であるらしいが、その確実な生活や国籍さえも未詳の人物であり、従つて此の説の信憑性は乏しい。われわれとしては斯うした原作者の詮議立てよりは寧ろ、作品そのものの鑑賞と理解が問題なのである。Thornton の写本に拠るテクストを前にして、まず此の詩篇の語る話の筋を辿り、その特異性の若干を検討することにしよう。

* 「アーサーの死」を意味するフランス風の題名を有つ作品は此のほかにも Malory の Le Morte D'Arthur がある。それについて

ては別の機会に考察することにしてしよう。

** Chaucer's 'Adam Scriveyn'

*** Cambridge History of English Literature, i, pp. 320—334, ii, pp. 115—124.

**** George G. Perry: Preface to *Morte Arthure*, ix. (E. F. T. S.)

Morte Arthure の概梗

此の一篇はアーサー王を中心とする円卓騎士の武勲を叙する物語詩であり、その題材の中核をなしているのはアーサー王対ローマの葛藤である。

まず詩人は神の恩寵を祈願し、聴く人々を裨益する物語を作る力を授け給えと祈り、続いて円卓騎士の美德を称揚する(二五行まで)。さて本題に入り、アーサー王は遠近の国を平定した後アスク (Usc) 河畔にカリーオン (Caerleon) 市を建設し、そこに群臣を集めて降誕祭の祝宴を張つた。元旦の日突如としてそこに罷り出たのはローマ皇帝ルーシウス (Lucius) の使節とその随員であつた。アーサー王がローマへの朝貢を怠り恣に国土を領有しているのを責め、今年の初穂祭にはローマに上り来るべし、さもなれば皇帝は兵を率いてアーサー王を攻め之を虜にすべし、と云うのが使節の口上であつた。之を聴くアーサー王の顔面に動く烈しい表情にローマの使節は恐れ戦いた。

これを見てアーサー王は

Haa! cravaunde knyghte! a cowarde the semezi!

(I. 133)

頭韻式「モルト・アルテュール」にうつり

「これはしたり、卑怯な御仁! 憶病者と見えたり」と敵の使節を一喝し、一瞬緊迫した空気が漂つた。しかし賓客の厚遇を要求する騎士道の精神に則り王は此の一行を懇ろに待遇し善美を尽した饗応を与えて、ローマへの回答について群臣と謀る間しばし彼等を王宮に留めた。

集つた諸侯群臣はいずれもアーサー王を敬愛する武勇の士であり、みなローマとの一戦を主張し、それぞれ手勢二万、三万、或は五万を引具してアーサー王の下に馳せ参ずべしと約束する諸侯の言葉は王をいたく満足せしめた。アーサーはその決意をローマの使節に告げて曰く、ほどなくイタリヤに兵を進めて、ミラン (Milan) 〃タスカニー (Tuscany) を攻略し、

I sallie hym sekryly ensue, undyre my seale ryche,
To seege the cetee of Rome wyth-in sevene wyutyre

(II. 439—440)

「七年の過ぎぬうちローマ市を攻め囲まんことを、太鼓判押してしかと彼 (ローマ皇帝) に約さん」と

と言ひ放ち、これをローマ皇帝に伝えよとて使節を帰らしめる。

使者は帰つて皇帝に復命する。その言葉の中に敵ながらアーサーを礼讃して、「キリスト教国随一の騎士」(五三四行)として

王を称えている。ローマのルーシアス帝は敵の意図を知り之に対抗するために、諸国の軍勢を駆り集める。ギリシヤ人、イタリヤ人の外にサラセン人等邪宗の民族各国より召しに応じて集り来る。ローマ軍の先頭には悪鬼の生んだ巨人六十人その他魔女魔法使など異様な者共が並んでゆく。

一方アーサー王も出陣の準備を進め、その出征中は甥なるモードレッド (Mordred) を副王に任じ、国事全般、王妃グイニヴァ (Guinever) のこと、宮廷森林のこと一切を彼に委ねる。アーサーはモードレッドに後事を托して云う、

If me be destaynede to dye at Dryghyns wylle,
I charge the my sektour, cheffe of alle other,
To mynstre my nobles, fore mede of my saule,
To mendynantez and myse in myschete fallene.

(ll. 664—667)

「われ若し神慮により死ぬべくば
わが世嗣は汝を措いて他になし。

そのときわが冥福のためわが財を散じ、
乞食、哀れる輩に施行せよ」

別離を悲しむ王妃グイニヴァを慰めつつアーサー王はサンウィチ (Sandwich) 港に向つて門出をする。その地に諸將は集結し、軍馬兵器を船に積み、いよくフリテンをあとに出帆する。船中で睡眠のあいだアーサー王は世にも不思議な體を夢みる。その體の頭と首は青色、肩は一面銀鱗で蔽はれ、腹と翼の色物凄く、兩足

は黒く、口よりは毒の炎を吐く。この體に向つて挑みかかつて来たのは一頭の獠猛な黒熊である。熊は體に向つて嘲けるが如く咆哮する。熊は熊に襲いかかれば熊も牙で體を突く。ついに熊は空中高く昇り熊の上に飛び下り、これを爪で捕へて水中に投げ下した。ここで夢醒めたアーサーはその夢の意味を二人の賢者に尋ねる。龍はアーサー王とその麾下の騎士達、熊は王の臣民を苦しめる暴君か或は王が合戦して打取るべき巨人であらうとの夢占いであつた。

やがて船はノーマンディ (Normandy) の海岸に着き、バリーリート (Barlith) で友軍の船隊に合する。上陸して野営したとき、アーサー王は、告げる人があつて、そのあたりに邪惡な巨人が住んでいて常に人間を捕へて之を喰う、その日もフランス女性の華と称せられ、グイニヴァ王妃の縁者である、ブリタニー大公夫人を捕へ去つたことを知つた。その巨人の住む所を聞き知り、王は二人の騎士を伴い大公夫人救出の冒險に出る。騎士を途中に待たせて王はただ一人山を登り行く。そのとき悲歎に沈んでいる一人の女に遭ひ、その語るところによると、大公夫人は既にかの巨人のために殺され給ひ、女はこれを葬りたるが、猶も悲しみのため去りやらず、命尽くるまでそこに留る心底なりと告げる。アーサー王は此の女人に案内させて巨人の棲家に近ずき見れば、怪人は横わりつつ人肉を喰つている。アーサーその残忍に耐りかねやにわに劍を抜いて挑みかかる。身丈五尋に余る怪人は突立ち上り鉄棒を振りあげアーサーに打つてかかる。凄まじい切り合いと

格闘が演ぜられ、とどアーサーは怪人を刺して倒すことを得たが彼自身も肋骨三枚を折られて疲れはてて横つてゐる。その安否を氣遣つて、王の帰りを待つてゐた二人の騎士が駆けつけ王を扶け起し、巨人にとどめを刺し、その首級をあげて持帰る。王の巨人退治を伝へ聞いたあたりの民衆は集り來つて王に感謝した。

この頃フランスから伝令が來て敵のローマ軍がフランスに既に侵入し掠奪殺戮を恣にしてゐるとの注進である。アーサーはガウェイン (Gawaine) その他の騎士を使者としてローマ皇帝の陣營に遣して退去を要求し、それを拒むならば皇帝と王との一騎打の仕合により勝敗を決しようと思込ましめるが、ローマ方はこれを拒否する。茲に両軍の間に激しい熱戦が展開する。追いつ追われつの死闘が繰返され、円卓騎士の面々いづれも善く戦う。殊に Syr Gawayne the gracious fulle graythelwe he wrykkes, The gretteste he gretes wyth gryselwe wondes

(II. 1468—9)

「高德の武士ガウェインはその活躍めざましく
強豪の敵手に深傷を負はせ」

超人的の奮闘をした。その他騎士ケイドウ (Cadur) も拔群の武功をたててアーサー王の称讃を受けた。

敗色蔽うべくもないローマ皇帝は援軍の來るまでサクソニー (Saxony) に入ろうとした。これを探知したアーサー王は之に奇襲攻撃を加へる策を立て、ここに再び格闘が演ぜられる。ローマ側の巨人の一隊は獯猛にして味方は之を防ぎかねた。それを見て

頭韻式「モルト・アルテュール」についで

アーサーは自ら名刀コールブランド (Colbrand) ^{***}を抜いてその一人を切り殺し、部下の騎士と力を合せて六十人の巨鬼を倒した。ローマ軍は今や退却し始めたがアーサー方は之を追撃した。ガウェインは皇帝ルーシアスに打つてかかつたが、流石に敵の総帥、容易に打取りかねたところへアーサー王現はれ、遂にローマ皇帝は王の剣にかかつて戦死した。敗走するローマ勢を追うて味方の将士は突撃し、屍の山を築いた。

ローマ皇帝の屍体は町重に棺に収められ、降服した二人の高官に引渡された。象に載せてローマに運ばれるのであつた。そのときアーサー王は此の二人に、余がローマに納めるべき貢物はこれ (皇帝の屍体) なる旨を歸りてローマに伝へよ、と命じた。

ローマ皇帝に対する一戦に大捷を得たアーサー王は戟を転じて独乙に入りメッツ (metz) 市を包圍して遂に之を陥れ、また敵の主將ロレーン (Lorraine) の大公を虜にしてイギリスへ送つた (二四一—三〇八四行)。この戦争中にも円卓騎士の数々の武功が語られてゐるが、わけてもガウェインが敵の武士プライエイマス (Priamus) と闘い、互に深傷を負はせ、後プライエイマスをアーサー方に加担させて戦勝の一因を作るエピソードは印象深い。

アーサー王はロレーンを平定した後、瑞西のルーサーン (Luncerne) に軍を進め、さらにイタリアに入りロムバーディ (Lombardy) を侵し、ミランを降し、遂にタスカニトに入りヴィテルボ (Viterbo) に宿營して將士とともに宴を張り飲を尽した。目

指すローマは既に指顧の間にあつたのである。ローマ法王は高僧をアーサーの陣營に遣し、ローマに於て法王がアーサー王に加冠の儀を行うべきことを伝へる。歐洲全土を征服し、降誕祭には戴冠式をローマで挙げ、そこで円卓の集ひを催す日が近い。アーサー王の得意や想うべしである。その夜王は夢を見た。美しい野原に遊んでゐる王の頭上に高貴な婦人が天降り来る。その両手で神秘的な車輪を廻はしてゐる。そして車輪の上に華麗な玉座が据えられ、六人の国王がそれに上らうと跪くが、みな地上に倒れ、みな己が生を呪う。之に反しアーサー王はかの貴婦人に迎へられて玉座につき、しばしの程は榮華を過すが、やがて貴婦人は荒けなくも彼を玉座から振り落とした（夢の場面三二二四―三三九四行）。此の夢を王に命ぜられて占つた学者達は、これは凶夢であり、王の命数の尽きたことを意味すると云う解釈を下した。

本国のカリーオンから一人の騎士が順礼姿に身をやつしてアーサー王のもとに來り、故國に於ける變事を伝へる。出陣にあつてアーサーが後事を委ねたモードレッドが王に對し異心をいだき、邪宗の徒を集めて軍隊をつくり、教會を掠奪して尼僧を辱しめ、あまつさえ王妃グイニヴァを己が妻として同棲してゐるとの報告であつた。戴冠の大典を挙げべきローマを指顧の間に望みながら、アーサー王は急拠軍をかえしモードレッド誅戮のため故國ブリテンに向うことになつた。

アーサーの軍勢はまずフランダース (Flanders) より船出して海峡を渡り、之を遡へて阻止しようとしたモードレッド方の水軍

を打破り上陸しようとしたが、海岸近くには敵の優勢な陸軍が待設けている。騎士ガウェインは少数の部下を率いて真先かけて上陸し、敵兵を倒しつゝ、モードレッドを目指して敵軍の中央に進み寄つたが、六万の敵に四方を包圍され、流石天下無双の勇士ではあるが、部下の騎士達に迫り来る危険を見て流涕する。ガウェインは彼等を激勵し、異教の徒と戦つて命を失へば死後天上の至福を得るだろうと教へて、潔い最後の善戦を彼等に望み、みづから劍をつかんで敵中に切つて入り、仇敵モードレッドの腹部に一撃を与へ之を倒し、とどめを刺さんとしたが却つてモードレッドのため短劍を以て頭を突かれて命絶えた。

ガウェインを打取つた後モードレッドは西方コーンワルに往きそこよりグイニヴァに書を送り、アイルランドへ遁れるよう勧めたが、彼女は自らの非行を悔い、カリーオンの尼寺に入り剃髪して出家の身となつた。

アーサー王はガウェインの跡について上陸し、その騎士達と共に賊軍を攻め獅子奮迅に戦つた。そのさなかに王は戦場に横はつていたガウェインの屍骸を発見し涙を流し声をあげて泣いた。跪いて屍骸を面の腕に抱へ、兜の臉甲をあげて之に接吻した。憶へばガウェインこそ彼の心友であり、騎士中の騎士であつた。悲みに堪えず王は失神し、立上つては又ガウェインの遺骸に接吻し、ためにその髪は血に染まるほどであつた。王は亡骸をウィンチェスタ (Winchester) に送り、懇ろに葬るよう命じた。ガウェインの仇を報ずるため王のモードレッド誅戮の決意はますます固く

モードレッドを追うてコーンワルへ軍を進めたが、敵勢は六万騎
味方は千八百騎、その衆寡の差を顧みず王は部下を鼓舞して聖教
のため戦つて死し天上の至福を享けよと告げる。味方の武士イド
ラス (Idrus)・イーウェン (Ewaine) 等みな善戦する。アーサ
ーはモードレッドを見つけて之に呼びかけ、

Turne, trayoure untwe, the tydys no bettre;

Be gret Gode thow salle dy with dynt of my handys!

(II. 4228—9)

「いざ来れ、不実な謀反人とは正に汝のこと、」

わが手にかけて汝を殺さで置くべきぞ」

その愛剣を以て相手の楯を通して肩を刺す。傷つきながらもモ
ードレッドはアーサーの腹部に深傷を負はす。王はひるまず更に一

* 英蘭西部 Monmouth 州に現存する町の名。

** ドーヴァーに近い古港。

*** 後世のロマンスでは 'Excalibur' と呼ばれる天下の名刀。

**** 「死者の樂園」を意味する傳説上の地名、Glastonbury と同一視されることもある。

此の頭韻形式の Morte Arthure を読んでまず感ぜられることは、全篇にロマンス的な寮囲気が乏しいことである。ス
タンザ形式の Morte Arthur は王妃とランロットとの情事が物語の中軸をなし、それに Astolat の可憐な乙女の恋
がまつわり、読者の柔い情緒に訴へる要素が多いのに反し、頭韻式に於てはアーサー王とその円卓騎士の運命、ひいては
サラセン的異教的勢力に対抗する聖教徒国民の運命が中心題材となつていて、此の両勢力の衝突とその消長が物語全篇を

撃を与えて遂にモードレッドを誅した。此の死闘により辛うじて
捷利をおさめ得たアーサー王は、戦歿した部下の將士の死を嘆き
わが生も茲に終ると観じ、死出の旅路に赴うと志す。生き残つた
騎士に運ばれてグラスタンベリに往き、アヴァロン (Avalon) の
嶋に渡りある莊園まで辿り着いたが、それよりさきへは進めな
い容体であるので、懺悔僧を招いて臨終の心構え。遺言して、愛
甥コンスタンティン (Constantine) を世嗣とすること、モード
レッドの子を誅すること、また王妃グイニヴァに非行がなかつた
なら之を赦すことを言ひ残して神に祈念を唱へつつ息断えた。王
の遺骸はグラスタンベリに移され、そこで盛大な葬儀が営まれ
た。(梗概終り)

通じて展開する。作者の関心は、騎士や貴婦人の私的な情操ではなくて、円卓騎士と云う集団とその集団を統率する君主の言行及びその結果に置かれている。つまり作者は語り古されたアーサー王伝説の素材を使つて一篇の叙事詩を意図したのである。^{*} 叙事詩とロマンスとの差違を定義的に解明することは茲に必要がない。頭韻式とスタンザ式の両物語を比較すればおのずから明かである。前者の関心が集団と民族の興亡、およびその集団民族の代表者の運命におかれているに反し、後者にあつては美貌の騎士とその周囲の女性との交渉が強調されている。

集団を代表する英雄はアーサー王のみに限らない。王の恩顧を受け王を敬愛する騎士達、ことに円卓騎士が戦場に於て身命を惜しまず、ただ一筋に主君のため集団のために奮戦する武士道精神の崇高さには現代読者の心に迫るものがある。例えばアーサー王最後の戦闘の場面に於て円卓騎士中の強豪 Sir Ewaine が多勢の敵に囲まれ危地に陥つていたのをアーサーが見つけ、Ewaine の一子 Sir Idrus に父を救出するよう命じた。Idrus 奉答して、養育の太恩を受けた父なれども今は見捨て申すべし、^{そは}

He commande me kyndly, with knyghthly wordes,

That I schulde lelely one the lenge, and one noo lede elles;

I salle hys commandement holde, yif Criste wil me thole! (ll. 4149-51)

「よそ人ならで陛下の御側にこそ忠実に留るべけれど、

父は懇ろに、武人らしくわれに命じ給えり。

キリスト許し給わば、われ父の命を奉ずべし」

と言ひ、親の死を目前に見ながら君側を去ろうとしない。忠たることが即ち孝たる所以であり、そこに騎士道の厳しい精神の一面がある。Sir Idrus はさらに言葉をつぎ「父もわれも共に捨つる命なれど、父は老体、われより先に行き給うは是非なし、願くばキリスト、彼の靈を加護し給へ」(四一五—一五五行)と結んでいる。本文十数行に足らぬ此の青年騎士の凜然たる言葉の奥にはまた、義理や知性で制し切れぬ情緒の動きをさえ感ずる。

戦場に於ける円卓騎士の武勲の記述に多くの行数を費している此の詩篇は殺戮流血の凄蒼さと騎士達の勇敢剛気の描写に傑れており、中世騎士道と云う枠の中に限られた人間性を善く表わしている。従つて他の傑れた叙事詩の表現する「全真実」(the whole truth)を此の詩に求めることはできない。しかし此の詩の作者は剛毅な真摯な人間性を描くなかに、諸諺を忘れていない。アーサー王が巨人退治に赴く際、彼は寺詣でに往くと伴つて二人の円卓騎士を伴つて出立し、途中で二人を待たせて置き、単身で巨鬼の棲家に向つた。流石のアーサー王も此の獯猛な鬼人は容易に討取ることができず、最後の格闘で王も巨鬼とともに巖から転げ落ち、深傷を受けていた巨鬼の傍らにアーサー王も疲れ果てて倒れている。そこへかの二人の騎士が駆けつけて王を扶け起すが、合点ゆかぬのはそこに横はる巨鬼の姿。寺詣でと聞いていたので之はそこに祭つてある聖者の尊像であらうか。それにしては何と醜怪な聖者であらう。騎士の一人 Bedevere は解しかねた体で

Be Myghelle of syche a makke, I hafe myche wondyre

That ever owre soveraygne Lorde suffers hyne in hevene;

And alle seyntez be syche, that servez oure Lorde,

I salle never no seynt bee, by my fadyre sawle! (ll. 1166—9)

「不思議千万、もしマイクル聖者がこんな姿してござるなら、

どうして天帝さまは彼を天国に置かれるぞ、

またわが主の御側近く仕へまつる聖者がみな此の態ならば

金輪際、聖者などにはなるまいものぞ」

と諧謔を弄する。アーサー王はそれを受けて「お詣りしたのは正に此の聖者だつたのだ。だから汝の剣を抜いて此の者の心の臓を刺してくれ」(一一七一—一二行)と戯言しつつ巨鬼に対する止めの一撃を命ずる。

諧謔と云うよりも寧ろ辛辣な皮肉を含む一節がある。それはアーサー王がローマ皇帝の屍骸を棺に収めてローマへ送るときローマの使節に王が言つた言葉である。此の櫃の中の宝こそかねてローマから促されていた貢物であり、今後とてもこれ以外の貢は送らない旨を帰つてローマに伝へよと命じたのである(二三四二—二三五行)。勝者としての誇りを中に含んだ小気味の良い名句である。

全篇を貫いている騎士道精神は、勇猛剛毅の美德を基調としていたともにキリスト教的教学理への忠誠さがこれと絡んでいる。作者が僧籍にあつたカトリック信者であつたろうと云う推定^{*}も肯かれる。例へばアーサー王がローマ皇帝を倒した後猶諸国を平定しようとする意図を明にしたとき、彼は法王の領国はすべて之を守護すべしと宣言し、「天帝のもとなるわれわれの父」(即ち法王)に逆うは愚であり、教会財産(the spirituelle)を尊重してこそわれわれの繁栄があると説いている(二四一〇—一五行)。また教敵、異教民族に対する憎悪が全篇を通じて強調され、アーサー王に敵対する勢力はみな邪教徒か、さもなくば邪教徒の援助を受ける不義不信の徒とされている。モードレッドの反逆には数多くの異教民族

(三五三一—三五五行) が加担している。アーサー王は斯る異教的勢力に拮抗して聖教を護持する英雄である。

此の詩篇の叙事詩的精神を現はすに寄与しているのはその詩形、即ち頭韻方式による韻律であろう。十四世紀に再興された古詩の此の形態を茲に詳論するではない。本稿中に引用した若干の本文がその片鱗を示しているように、素朴剛健な律調に屢々崇高な雰囲気を加えている。

十五世紀にサ・トマス・マロリ (Sir Thomas Malory) がアーサー王ロマンスの集大成を企てたとき、此の詩篇を底本としてその中の一卷 (Caxton 本の第五卷) を書いたことは明かである。最近のマロリ研究家 Eugène Vinaver にはその詳しい比較研究がある。^{***} Malory は散文を用いているがその中に頭韻的表現が多いのは此の底本の影響によるものと考えられる。

* George Kane: Middle English Literature (London, 1961), pp. 69—76 参照

** George G. Perry: *Morte Arthure*, p. 71, footnote

*** *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols, Oxford, 1947. 特記 Vol. III, pp. 1360—1397.